

日本短篇文学全集
27

滝井孝作
上林 暁
外村 繁



責任編集 臼井吉

筑摩書房

日本短篇文学全集 第27卷

昭和43年10月25日第一刷発行

滝井孝作

著者 上林 暁

外村 繁

発行者 竹之内 静雄

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8

郵便番号 101—91

電話 東京(291)7651

振替 東京4123

製版・明和印刷

印刷・多田印刷

製本・鈴木製本

定価 360円

目次

滝井孝作

父祖の形見 三

大火の夜 二〇

梅の花 三〇

山の姿 三三

上林 暁

野 三

夏 曆 一〇四

聖ヨハネ病院にて 一四四

白い屋形船……………一八〇

外村 繁

夢幻泡影……………一五九

最上川……………三六

落日の光景……………二四六

鑑賞(串田孫一)……………二七三

装幀 枅折久美子

滝井孝作

滝井孝作（八四）

明治二十七年四月四日岐阜飛騨国高山町に生れた。少年時代から俳句を習い河東碧梧桐に認められる。大正三年二十一歳にして上京。大正四年から七年まで碧梧桐主宰の俳誌「海紅」の編輯助手をつとめた。大正八年「時事新報」の記者となった。大正九年雑誌「改造」の記者。大正十年から作家生活に入り今日に至る。「手織木綿の如き、蒼老の味」をもつ徹底した写生文の一筋を歩いた。昭和二年唯一の長篇小説「無限抱擁」を刊行した。昭和三十五年から日本芸術院会員となった。著書は「無限抱擁」の他に短篇集「積雪」（昭和十三年）「郷愁」（昭和二十五年）「野趣」（昭和四十三年）、隨筆集「野草の花」（昭和二十八年）「生のまま案のまま」（昭和三十四年）「翁草」（昭和四十三年）がある。

父祖の形見

父

店の室の細工場さいくばの所は、仕事盤の座のうすべったい座布団にも芥埃ごみほこりがくっ付き、現在は人の気のしない打棄うちちりり放し。道具の鋸のこぎりも鑿のみも鉋かんも古く研滅とぎへり、小刀は昔の刃の小柄こづかを利用してこれも細く針の如く研滅り、いずれも老父が身も骨も研滅し使い尽したものの、と見たりした。現在の指物師は、器械きかい鋸のこや便利な道具や、膠附にかわつけなどもっと便利な接合剤、使う工合だが、老父の細工場のまわりには新規のそれらは見当らなんだ。手馴れた体にしみこんだ道具愛用した、とぼくは見廻したりした。

この細工場の用材など堆うづたかい傍に、木造の何か器械

の雛形が見出された。先日、葬式の夜伽よとぎの晩、復また從兄いとこがぼくに話した造りかけの雛形ひながたの事が思出された。復從兄はこう云った。

「この小父様は、今迄にいろ／＼の事に手を出いで、大分損もしてござるが、まあ自分で働いて溜めらさったものじゃでなア。何の器械か雛形の造り掛けがまだ店の方に見えたので昨日も見たが、『この専売特許をとると一と身上起すゾ』と昨年夏頃に云ってござったが、何の器械か拵こしらえ掛けで今は分らんけど、八十以上の年齢でもまだ何やらやり出してござった。あの元氣意気込と云うものは、偉いものじゃゼナ」

と云ったが、この昨年八十一歳の老父の考案と云った、一尺に二尺位の角板に取附けた木造雛形の傍に近寄って見た。小歯車の幾つもの組合せと円形の直径一尺余の一個の箱と箱の中に翼車の廻る仕掛も見えた。まだ造り掛けの雛形のように、何の器械か

見た所分らなんだ。老父が晩年にもくろんだ未完成のものだと思つた。ぼくは子供の時分から店二階の用材置場に斯様な雛形が二三ころがり打捨てであるのも思出した。父は指物細工のかたわら、また専売特許にこつて、何かしらやっていた。今から二十五年も前に、ハガキ入函の考案が実用新案で登録された。また今から十年前に改良車の考案二通りこれも実用新案登録を取得た。老父は改良車の権利の買手がないかと国から出てきて、奈良にいたぼくに相談したこともあつたが、ぼくは、金儲の方めんどくさがり一向気乗がせず権利の買手探すこともしなかつた。老父は新案の専売品、国の方で拵えたがそう売捌けずおおかた費用は損になつた。権利の方も買手がつかなんだ。——ぼくは或時往来で軍隊の行列に出会つて、砲車や彈藥載車や輜重車や見ながら、フト在来の車と異つた轂の部分に注目して、軍用車の轂は二枚の鉄板で車の輻を挟みボルトで締固めた構造で、

この構造見て、ぼくは老父の考案の改良車轂と同じものと見た。老父の実用新案権の、権利侵害かナと思つて見た。実用新案権は存続期間は十ヶ年のわけだが、はじめの登録だけでは三ヶ年で、あと存続登録しなければ権利がなくなる。老父はあとの存続登録はせずにしまい、今は誰でも利用できるから、老父の考案の車轂の方は今はかく採用されているわけだナと思つた。——考案が登録にもならず仕舞の方は、ぼくの子供の時分から店二階に転がった二三の雛形と、今から十一年前に家の土間に組立てた製板器械、これはすでに似たものが他に出来上つていて専売は受からず、今、製板器械は解体して店の室のあちこちに帶鋸や鉄棧やボルト類が片寄せてあつた。今細工場で見かけた最後の未完成の雛形も、八十一歳の高齢にかかわらず何かまたやり出した元氣と云うものは、偉いと念われた。

「これで一と身上起すゾ」と云つた念願はずつと以

前からで、ぼくの幼時明治三十年時分には山師のかい入札でほとんど家産も傾け、大正の初年には山に苹果畑開拓して苹果の樹は大方虫にくわれたり、七十歳以上の晩年はまた金鉢の方にも手を出し、指物師の家業一と筋には行かん性質があつた。家産の傾いた時分いつも喧し屋の祖母が罵るたびに「オミはイキスギじゃぞよ」と云つたが、汝は行き過ぎやぞよと云われた血氣の性質が、老父の晩年に續いて溢れていたとぼくは祖母の詞も思出したりした。

老父は仕事の弟子はなかつた。子供時分ぼくは細工場で手翫していて指物は習つてもいゝと思つたが、十三歳の時母が病死して、それから魚問屋へ丁稚奉公にやられた。明治三十九年頃で、指物の職は拂々しい収入のない貧乏ぐらしで、ぼくには商売仕込む考えになつたらしい。ぼくは十九歳の年まで魚問屋にいたが、商売も身にします、父に垂いて奉公先から他国へ飛出してしまった。斯子供にも垂かれた父

は、元來指物では身上起せぬと考えた父は、後年も、弟子を持つ氣にもなれなんだのだ。

指物細工も、明治三十五年頃から新しい意匠の一位細工をはじめたが、一位細工師専門には行かなんだ。いろいろの方面に手を出した。碁盤の製造では樞材の黄ろいつや磨きに豆油を自分で拵え、漆の目盛も屏風立廻して自分でした。昔の長持の桐板を接合で軽くて慥かりした箱火鉢も造つた。佳い指物拵えて、それを需めるすき者が土地に多かつたのだ。町の旦那衆がよく細工場へあがりこんで話してたりした。一個百円につく火燵櫓工夫して造らせた話もあった。それは春慶塗の火燵櫓で指物よりも入念の塗りが高価かもしれないが、そういうすき者のいた土地の氣風で、製作者も面白いものが拵えられたのだ。が、金持の註文でも氣にくわねば肯ずかず註文主と諍いもした。都会の博覧会には必ず指物の出品した。老父はいつも午後三時には細工場から出て

風呂へ行つてきて晩酌に向う例で、悠々とやっていった。八十歳の晩年にはさすがに手が鈍ぶった。二階の方に、一位材で造った紹鷗棚などもあつて組立てみたら、今は膠の接合目が切れたりした。

老父のことは、思うにつけ、遺品見るにつけ、大方感傷の種になったが、今はすべて打切つて、跡片付けせねばならなんだ。

指物の用材は仰山のこつて、店二階二室と裏の物置の方とに場所塞げに見えた。桑の一抱え二抱えの両つ割にした材が何本もあつて、其他は一位材や桐板も見えた。半端の木切れが仰山あつて、木切れも指物の場合に依つては用途があるから捨てず溜つたらしかった。この用材は弟子があれば譲るのと思われた。しかし譲られても場所塞げの代る物に見えた。恰好な引取手があれば老父がすでにその方へ片付けていたにちがいないと思つた。親戚の木彫家の村山は、先年老父から頒けてもらつて、彫刻の上箱

になるような桐板だけ一と車ほど引取つた由で、村山はこんども用材の始末に付いてぼくに云つた。

「俺ん所で用い途になる材はもうなかったゾ、一昨年店二階の方も裏も見て廻つたけど。俺ん所でも始末に困るほど溜つて、今では一位の材でも、いらんのはかまわず割つて薪にしとるのじゃ」

ぼくは、材木屋に渡すほかないかと思つた。そして材木屋が見にきて見て廻つたが、引取ると云わず値段も云わなんだ。なお一軒の主に珍しい材を扱う材木屋もきたが、やはり値段はしなかった。商売人は只是評価しないらしいが今世間の不景氣から大方寝物になるのでまず引取れない工合に見えた。ぼくは家の寝物の指物の方に向い、何の材か分らない材の肌など見ながら、材木屋の来たついでに、訊いてみた。

「これは何の材かネ、桐の堅いような材だが」と廚子造りの茶棚指したら

「これや、ネムリの木ですゼナ」

「ネムリの木、合歡ねむの木か、夏淡あかす紅い花のさく」

「へえあれですゼナ。これや俺おれん所から来た材で、おぼえとりますで」

「この机は、何の材かネ。桑に似とるが、桑でこんな二尺巾の一枚板は取れないネ」

「これや、シオジですゼナ」

シオジと云う材の名は、一昨年老父がシオジの机と云ったこともあって、今思出した。

「その衝立ついでは桑ですなア。こちらの縞柿かきの衝立、これやこう黒柿に見える斑ふは色付けて拵しらえられたものですゼナ、材はやはり柿です。ここのは、色付けも上手じゃったなア」

材木屋はかく話したりして、帰った。次の日、国分寺通の方の指物屋が用材見に来て、一位の材だけまず十円で引取ると云った。桐板は、縁戚わの西田の長男が、簞笥たんすを造らせるから十五円で頒わけてくれと

云った。桑の材は、友だちの上村君がひと手に三十円で買おうと云った。ぼくは値段のことはよく分らんが大した品でもなし、相手の方信用してこれで材は片付くから、買手の言値のまゝ、渡すことに定めた。おのおの来て選り分けて、荷車に積んで運んだ。上村君は二階から材を下ろす時、

「こゝの一と並びはみんな桑の材かと思つたけど、中に槐えんじゆもあるなア。裏の方のはウツロもあってそう好うないもなア。えい材だけ、二階に上げて別にしておかれたのであらず」

と云つたりした。この一日中、ぼくも従弟と共に芥埃ごみほこりあびつゝ材の片付けした。半端の木切れは束にして、土間に薪用に積上げた。この家の留守居する叔母おきの焚木たきぎがたくさんできた。従弟はまた、この木切れで夏休みに手翫てびりの細工すると云った。上村君は桑の材で茶簞笥たんすなど造らせるから黒柿の材もいると云い、黒柿はちよつとの切端も用途になるから纏まとめ

てあつたが、みんな云うなりに与^やつた。上村君はあとでこんなことも話した。

「製板に一日附いていて板に挽かせてみたが、桑の材は五六尺の茶簞筥三本とれる位あつたす。こゝの小父^{おつさま}様がどうしてあの材を用^{つか}わつたらんだかと云うと、山桑は永年放^ほつといて、次の代になつて指物に用^{つか}うので、小父様の代には用^{つか}えなんだのじや」
老父はこのような用材、ついに役立てないことも分りながら集めていたのは、指物師として好い用材

に惹かれたからだろう。この何十年も枯らしてから用^{つか}う桑の材の、己^{おの}れの代に使えぬような用材も、かく蒐^{あつ}めていたこともまた、老父は血の氣が多かつたと考えられた。

祖父

用材の片付けしている中に、一枚の板の煤^{すす}まみれにて墨書の字のみえる「棟札^{むねふだ}」という一個の板も、用材の間から出てきた。煤まみれの板の字は、滝井

明治十八年

乎置帆辰命

奉 謹 請

咒 曰

彦狭知命

謹請五方五徳元氣
靈神壽命无疆无病
堅固遍久与楽怨敵
退散子孫繁昌富裕
自在如意安樂哀愍
納受乎垂礼給止恐
美恐美毛申拜

四月九日吉兆撰棟上

同 西田辰之助

匠 滝井新三郎

匠 棟梁滝井与六貞宜

匠 西田伊三郎

同 滝井和二郎

木挽 畦畑彦助

左官 荒川弥平

葺師 吉崎平四良

黒鍬 水口作右衛門

石工 中野和吉

滝井与六敬書

与六敬書としるしてあつて、ぼくの祖父の手蹟で、大工の棟梁の祖父のことがハッキリ分るようで、この棟札は、保存しておくことにした。

明治十八年のこの棟札は、祖父等の城山の中学校建てた当時の物、と年月日から考えて分った。今は城山の元の校舎も建替つて、取毀した時、煤まみれのこの棟札も出てきたらしかった。

家にはまた、祖父の手蹟で『祝詞』を記した奉書紙も一枚保存してあつた。ぼくはまた披いて視た。

『掛卷母畏岐木道乃祖神乃御名平 申 弓、奉 称 辞
ツル、
竟、是乃御床仁請奉弓謹美敬比恐美々々申寿、天
皇賀朝廷乃大詔持弓、天地乃限有止在事乃限里、
教授今論導加武止為留御布令乃随意、此里乃学校
平各母々々励美造竟弓、今日乃生日乃足日爾大神
乃大前爾、匠滝井与六貞宜、諸々乃平人等心合申
弓申佐久是乃御館渡、明治九年余五月九日朝日乃
豊坂爾登捧持弓、棟上乃寿詞平、掛卷母畏岐天津

奇護言乎以弓、言寿鎮白佐久……』後略。

校舎の上棟式の祝詞で明治九年五月の日附から、高山町で最初に造った「煥章学校」と云った当時の、竣工の文書の一枚かしらと考えられた。

この奉書紙の祝詞から、ぼくは、学校の竣工の建物も思描いたりした。

この校舎は、ぼくらの少年の頃は「高山尋常小学校」と云つて通学したが、今思描けば、母校は佳麗に看えた。明治初年の仏蘭西風に倣つた、白聖の西洋館で木造総二階、校庭の東北側にかぎの手の建物。二階のヴェランダの欄は二階に周ぐり、軒端の円柱はヴェランダ保つ配列で所々に立つた。円柱のならぶ軒下の三和土は廻廊のようで、窓々に沿い廻り歩けた。欄や円柱や窗枠や淡緑のペンキの色も枯れた。正面玄関の廂の軒の、大鷹の羽ひろげた塑像も、明治開化の象徴らしかった。校舎の壁はどこも白聖。屋根はのし葺。屋根の上にまた、西洋風の塔が看え、

塔の先の尖柱には、運動会の日高く旗も掲げたりした。塔の中階の、窓内の大太鼓、毎日正午の時の報に叩く音がきこえた。塔の上階の、窓先の半鐘、不時の町の出火などに打鳴らしたりした。悪童らは「わるさすると太鼓部屋へ押込まれるゾ」と塔の方恐わがった。別棟の北向の白聖は、桐畑と向合い軒端に鳩が巣くって殖えて、白聖は鳥の糞で汚れた。

校庭の大柳二本は往来で仰向かれ、棚の上の大枝の桜も、明治三十年代にすでに老朽に看えた。これらの老幹は、むかし此所の馬場の時の駒繋ぐ木立らしかった。ぼくの自家は学校の近所で、幼時夜分は学校の柳の木は恐わくて、夜分一人で往来できなんだ……。今、家に住む叔母の話きいたら、「祖父様が馬場に学校を建てらさった時、この家もこゝへ自分で建て、元の大雄寺の下から宿替してきた」と云った。

ぼくはまた、母校の建物の写真絵葉書も尋ね出し

て視た。この校舎の建築意匠は、二階の周りのヴェランダの欄と、軒端支えた配列の円柱と、この美しさが主調のようで、軒端の迫持や、ヴェランダの手摺のまる味や、軒下の腰壁のふくらみや、正面玄関の廂の張出しの円形や、およそ柔かい線の諧調で、屋根の方もまた、塔の中階の角形と上階の六角形等面白かった。全部に丹念の工夫の行届いた設計と視た。

この設計は、当時、町の有力者によい指図役が多かったのだろう。かく美しい校舎の建った容子から、当時高山町は富裕で豊かでくらしよかつたろうと考えられた。——高山では「学校」はこの以前にもあり、明治維新の時の知事梅村速水が、寄附金募って元年七月に迅く宏荘の学校を建てその校舎は翌くる二年三月、一揆の打毀しで覆亡したと云う。明治五年八月の学制頒布に依って、高山町では六年十二月から「煥章学校」と云って、御坊に仮りに開いた。

本校舎の建つまで生徒は御坊の寺へ通学した。――

本校舎の建設には町の有力者が骨折ったろう。設計の指図役は進取の気象のすぐれた人々で、旅行もして方々見て廻って、工夫して歩いたろう。大工の祖父も明治初年の横浜東京あたりの西洋造も見に行つ

たろう。明治開化の東錦絵や銅版画や持戻って、西洋造視て、倣ったろう。祖父は明治四十一年の八十二歳の年までいたから、明治九年は五十歳の年では

く父新三郎は二十二歳の年に当る。長男新三郎は新進気鋭の意気込で、二男和二郎も大工で、共に校舎の建築助けたらう。竣工して五月九日の上棟式に、祖父も装束の烏帽子直垂にて、祝詞

「……此ノ敷キ座セル大館ヲ、底津石根ノ極ミ下
津綱根ハ被布虫ノ禍無ク、青雲ノ棚引ク極ミ、天
ノ千足飛鳥ノ禍無ク、諸々ノ役木戸牖ノ錯動キ鳴
ル事無ク……」

と心から祈って、読んだらう。

ぼくは今、この祝詞の奉書紙披らき、明治十八年の煤けた棟札も、また見た。祖父の手蹟は、自由に書ながら字配りも正しく、大工にしては慥かりと力の張のある字と視た。祖父のこれは私塾に通い習つたらしかった。

――
祖父の所持の短冊挾には、六十一の賀に同好から寄せられた短冊や、老楽の短冊も、老楽は祖父の雅号でこの自分の筆蹟も、この短冊挾の中にいれて在った。

滝井ぬしの六十一の賀に

打は遊る曾の墨繩の長岐世乎堂々飛と筋に君や

辺ぬら舞

豊彦

屋登のなの滝のしら波敷布れど老せぬ君と千代

も経ぬらん

松園

右二人は高山町の国学者流

元朝に松のよ楚生をめでし

春まだき御代の光りに若松も延て久しき榮え行
ら舞 老 楽

夜の卯花

卯の花の雪をかさぬる袖垣にすゞしくやどる夏
の夜の月 老 楽

祖父のこの月並の和歌は、ぼくもこの短冊で初め
て分った。

沢田氏祝う

無事無難福が寄きて土蔵造るこの行末もさかえ
ゆくら舞 老 楽

屋根石がおち人が氣にかけを祝直して如此
哥を詠ける

屋根石が落たといふて氣にかけぬあげてすまお
くよろくなりけり

家内和合

いへの字千寿命長久猶無病商売繁昌富貴繁昌

老 楽

世 渡

世渡りわ坂に車の教へ艸ぐさ

老 楽

祖父は一介の太工で短冊は他に贈る身分でもなく、
ただ自分の心慰こころなぐさに、折にふれて斯如かくのごとく書いたらしい。
此の四枚の短冊の歌句は、隠居所生活の写実で、
ぼくの子供の頃に見た祖父の心持も分るようで、今
短冊一枚々々視た。

「沢田氏祝ふ」のこれは、隠居所の庭の横手にな
りて土蔵建て、子供のぼくも、沢田では金持になつ
て土蔵建てたと隣の方見たりしたが、祖父は「無事
無難福が寄きて土蔵造るこの行末もさかえゆくら
む」と祝い、自家の生活向の難儀の際で、詠ぶりに
は平俗の写実の味あじわいもあった。

「屋根石」の出来事は、隠居所の板葺屋根の押石一
個ひとりでにころがり出して音たてゝ庭へ跳落ち、
子供のぼくも大ぶりの南瓜かぼちゃほどのやね石を庭で看みた。
平日屋根石はころがり出さぬから、何かの障さわりか凶